

グローバルエリート育成機関としての米国

2012年10月に、京都大学教授でiPS細胞研究所長の山中伸弥氏にノーベル生理学・医学賞が授与されることが決まった。iPS細胞は再生医療に画期的な手段を提供するものといわれ、このような先駆的な研究で日本人研究者が世界的に評価されていることを誇りに感じる。

山中教授も含め、このところ日本人のノーベル賞受賞が相次いでいる。2000年以降、ノーベル物理学賞、化学賞、生理学・医学賞の自然科学3賞では、日本の受賞者数は米国に次いで世界2位である。昔から、日本人は独創性が足りず、その原因は教育制度の欠陥にあるなどと言われたものだが、そうした認識は今や過去のものになった感がある。

しかし筆者が気になるのは、最近の日本人のノーベル賞受賞者の経歴を見ると、ほとんどの人が米国の研究機関や大学に在籍した経験を持っていることである。山中教授のiPS細胞の研究も、カリフォルニア大学サンフランシスコ校グラッドストーン研究所での遺伝子やES細胞（胚性幹細胞）の研究が始まりという。山中教授は次のような話もしている。すなわち、日本へ帰国した当時、日本の研究環境が米国に比べてあまりに劣悪だったため、一度は研究活動をやめようと思ったというのだ。このような話を聞くと、世界的にも優秀な日本人研究者の多くが、いまだに米国の研究システムから多大な恩恵を受けていることは否定できないと思われる。

米国に留学している日本人を対象とした就職イベントが、マサチューセッツ州のボストンで毎年秋に開催されている。「ボストンキャリアフォーラム」というこの催しは、米国に留学している日英バイリンガルの大学生および大学院生と、グローバル人材を求める日本企業とのマッチングの場であり、8,000人以上の学生と200社ほどの企業がコンベンションセンターを舞台に一堂に会する。野村総合研究所（NRI）も毎年参加している。

主として日本人学生と日本企業を対象とした催しのためか、参加者にはスーツ着用が求められている。そろって黒のスーツを着た学生の集団はまるでアリの群れのようにあり、その光景は一種壮観でもある。筆者などは、これで本当にグローバル人材にリーチできるのかと一抹の不安を感じないこともないが、「ボストンキャリアフォーラム」に参加する日本人学生は世界中から米国に集まる留学生のほんの一部である。

米国には、高等教育や先端研究の場を求めて全世界から多くの優秀な学生や研究者が集まっている。米国への留学生の数は2010年度～2011年度には約72万3千人に上るという。グローバルエリートへの転身を夢見て米国を目指すアジア人留学生の数も増え続けており、特に中国人や韓国人の比率が高い。中国人留学生の比率は2年連続でトップとなり、2011年には留学生全体の20%以上、15万7千人を超えるという。最近では中東諸国からの



留学生も増えており、サウジアラビアなどは前年比44%も増加している。アジア諸国に続いて中東諸国がグローバルエリート競争に加わる勢いであり、米国がリードするグローバルビジネスの拡大に合わせて留学生の裾野が広がっていく構図になっている。なお、日本から米国への留学生は前年比14%減の2万1,290人である。（上記数値は米国の国際教育協会の発表による）

ちなみに、独立行政法人日本学生支援機構によると、2011年5月1日現在の日本における外国人留学生の数は約13万8千人である（国籍別では中国人留学生が最も多く63%を占める）。米国の人口は日本の約2倍だが、留学生の数では日本の5倍以上である。いかに米国のグローバル人材プールが大きいかが分かろうというものである。

この人材プールは米国にとってどのような意味を持っているのであろうか。もちろん、高い授業料を払ってくれる米国教育産業にとっての顧客という見方はあるだろう。また、米国にとどまってグローバル競争の中で米国のために戦ってくれる将来の戦士たちをその中に見いだすこともできるだろう。しかし、何よりも米国にとって意味があるのは、自由主義や民主主義、そして資本主義といった米国流の考え方が、それを身に付けた海外の学生や研究者がそれぞれの国に戻ったり他国で活躍したりすることで世界中に広がることで

ある。それらの学生や研究者は、結果として「米国教」を世界に広める布教者となっているのである。

米国流が浸透していくことで、価値観や行動様式を共通にする人的ネットワークが世界中に広がり、国境を越えたビジネスや共同研究の素地がつくられていく。今日のグローバルビジネスの進展に、米国に集まったグローバルエリートたちが大きく寄与していることは確かだと思う。

最近、グローバルビジネスをけん引してきた米国がアジアなどの新興国の勢いに押され気味だという論調が強くなっている。米国で教育を受けた新興国のエリートが米国の脅威になっているというのは皮肉な話だが、グローバル化とともに繁栄する米国に方向転換を迫るようなことではないだろう。

米国はインターネットをはじめとする情報通信技術の発展に先駆的な役割を果たし、世界中の誰もがグローバルビジネスの場に参加できる手段を提供してきた。グローバル人材の育成とグローバルビジネスの手段という、ソフト面とハード面の両方で米国は世界の推進役を担ってきたのである。

米国という国は、意図しているか否かは別として、グローバル化とともに存在することを宿命としているかのようである。グローバルエリート育成機関としての米国の役割は引き続き大きいものであり続けるだろう。 ■